

# 岡山市近世寺社建築調査(1)

建造物研究室

**調査の概要** 岡山市近世寺社建築調査は、岡山市教育委員会が平成6・7年度の2カ年にわたって行うもので、当研究所が協力することになった。岡山市は、昭和40年代に周辺町村を合併して拡大したため文化財建造物の把握が十分でなく、その調査が必要であった。そこでまず最初に、近世以前の寺社建築を調査することになったものである。最近増加しつつある市町村単位での調査であり、県単位調査に比して調査面積・件数ともに少なくなるため、悉皆調査が可能な点に特徴がある。しかし岡山市の場合は、かなり面積・件数ともに多いので、以下のような調査方法をとった。

まず最初に、教育委員会から委嘱されている各地域の文化財モニターによって予備調査を行った。予備調査は、旧市史などに掲載されていない寺社について、寺歴や棟札など史料の有無を中心とする調査票の記入と、写真撮影を行い、総件数は231件にのぼった。つぎに1次調査として、近世以前であるか、もしくは近代のものであっても施行者あるいは大工に特徴を有すると判明したもの、および予備調査段階で不明なままであった物件を選び出して、史料調査、様式による建立年代の判別、建造物の構造形式の記録、写真撮影を行った。調査は、9月26日より30日までと、10月24日より27日までの2回に渡り163件を行い、1物件に複数棟ある場合が多いので、調査棟数は約400棟になった。ついでこの中から、建立年代が古く貴重なものや、構造・意匠に特徴があって貴重なもの、あるいは歴史的意義や地域的意義の高いものを選択し、10月27・28日と、11月14日より16日までの2回にわたって、2次調査を行った。調査件数は23件で棟数は36棟になった。2次調査では、調査票の記入・配置図の作成・平面実測・写真撮影を行ったが、とくに小屋裏・棟札の調査や痕跡調査を含み、予備調査と1次調査で調べられたことをより詳細に調査・記録することを目的とし、かつ調査対象の歴史的経過の把握と、文化財としての評価が行われた。

なお、7年度も引き続き1次・2次調査を行い、年度末には調査報告書を刊行する予定である。

**調査の成果** 1次調査の結果、岡山市内の大多数の近世寺社建築を調査したことになる。今回調査した寺社建築の中には、清泰院の池田忠繼や忠雄廟唐門、あるいは東照宮のように江戸初期のものもあるが、これらは既にある程度は知られているものなのでここでは触れない。今回初めて調査されたものでは、最も古いものでも元禄年間と、江戸中期以降のものがほとんどであった。これは、岡山市の中心部にあった備前藩の主要な寺院が戦災で失われてしまったことが影響しているが、そればかりでなく、備前藩では寛文年間に第3代池田光政によって相当数の寺社整理が行われ、約460の寺院と約600の神社しか残されなかつたことが遠因となっている。寛文の寺社整理と戦災によって淘汰された結果、江戸初期に遡るものは他地域にくらべ少ないという特色が形成されたのであろう。

そうした中で、おもに周辺部に残された元禄・享保年間の貴重な遺構を発見できたのは、今回の調査の大きな成果であった。これまでに知られている江戸前期の寺社建築の多くは、中世以来の大寺院

か、藩主の造営になるものがほとんどであったが、今回見つかった17世紀末から18世紀中頃までの寺社建築は、地域の生活により密着した中小の寺社であり、江戸前半期の庶民の生活が伺える点で貴重である。以下、寺院建築と神社建築に分けて概要を報告する。

まず寺院建築についてみると、この地方は古代末期に成立した備前四八ヶ寺と呼ばれる真言宗を中心とする密教系寺院が勢力をもっていた。今回の調査でも明王寺・東斎寺・幸福寺など、密教系寺院に大規模で良質なものがみられた。とくに妙法寺は、中世建立の建物の部材を相当数再利用して、18世紀後半に立て替えられており、中世密教寺院の平面や意匠を色濃く残していた。このことにより、年度末には市指定文化財に加えられた。

この地方のもう一つの特徴として、日蓮宗不受不施派の一大根拠地であったことをあげなくてはならない。不受不施派の寺院は寛文の寺社整理のとき他の宗派よりも多く廃絶に追い込まれたが、今回の調査では、このとき生き残ったものや、その後再興されたものが相当数見つかった。妙広寺・妙林寺・大林寺・盛隆寺などであるが、これらは地域の精神史の史料として貴重である。

また地域別にみると、児島湾に面する港町であった地区に、特色ある古い寺院建築が相当数みつかった。掌善寺・円蔵院・三蔵院などであるが、これらは船主など富裕な町人の寄進により元禄から享保にかけて建てられたもので、装飾性の強い趣味や、非常に新しい構造・意匠の積極的採用など、当時の町人の気風をよく表現していて価値が高い。また、地区に限らず児島湾沿岸では流文や雲文を豊かに使用する傾向が強く、しかも全国的に見ても装飾が多くなる時期が早い。これは、瀬戸内海航路や児島湾内航路により生計を立てるものが多かったこの地域の生活が関係していると考えられ興味深い。

このほか、中世の厨子をを残す常福寺や民間信仰を伺わせる正法寺、重源ゆかりの浄土寺と境内社の日吉神社も興味深い建物であった。

神社建築では、予想以上に近代になって建て替えられたものが多くかった。これは明治期に、国家神道との関連で神社を建て替える傾向が広くあったことを意味している。とくに村落の氏神である小社は軒並み建て替えられていた。そうした中で、菅野八幡宮・粟村神社・岩熊八幡宮・武部神社といった、17世紀から18世紀にかけて建てられた村落の鎮守が、若干でも残っていたことの意義は大きい。これらを通じて、この地域の近世前半期の様子が窺い知れるからである。

上述の寛文の寺社整理関係では、このとき廃止された小祠を合祀する「寄宮」の一つが置かれた布施神社が重要である。建物としても非常に質の高い建物であり、今後の研究が待たれる。

このほかでは、日本3大稻荷といわれる最上稻荷の靈応殿が18世紀中期の建物でありながら、尾垂木に龍の彫刻を使う。このような装飾は全国的流行でもあるが、隣の津山では17世紀中期にすでにみえるのでその影響も考えられよう。松琴寺内の瑜伽山大権現は、藩主がここで隠遁生活を送るに際して児島の蓮台寺の瑜伽大権現の写しとして建てさせたもので、その成立事情故か装飾技法が特に進んでいる。清山神社は板倉氏が先祖を祭った神社で、武具を納める土蔵がそのまま神社となつたかのような意匠が興味深い。

(藤田盟児)